（公財）中央果実協会
No.302

オーストラリア産バナナを日本に試験出荷

ASIAFRUIT　2023年11月27日

クイーンズランド州産のバナナとメロンが日本に出荷された。これは、儲かる可能性のある日本市場への参入を狙ったオーストラリア初の試みである。

パシフィックコーストプロデュース社がクイーンズランド州北部で栽培した先端に赤いワックスがついた「エコガニック・バナナ」が、東京の高級小売店「ヤオコー」で開催されるバナナの試食・販売促進イベントに送られた。同州農水産局（DAF）の園芸専門家らは、4年間にわたり業界関係者と協力して、貯蔵温度や熟成条件などの輸送やサプライチェーンの状況が果実の外観や風味に与える影響を分析してきた。

また、もう一つの新たな試みとして、バナナの輸出時にはシドニーを経由せず、ケアンズから直接空輸し、時間とコストを節約した。空路での直行便により、サプライチェーンの最適な状態を維持することが容易になり、食品廃棄物のリスクが軽減され、果実が最高の状態で到着することが保証される。この出荷から得られたデータは、ケアンズからバナナを航空便で輸出する可能性とその障害について考察する参考となる。

また、DAFの園芸専門家らは、消費者の嗜好を把握し、オーストラリア産のバナナと他の輸入品を比較するため、日本の一般消費者の参加を得て目隠しテストを実施する。

今週の試食イベントでは、デインツリーフレッシュ社が生産したエンペラーズパールメロンも紹介された。クイーンズランド州はオーストラリアのメロンの大部分を生産しており、黄色い果肉の品種は日本でもすでに人気がある。エンペラーズパールのようなニッチな品種は、業界の成長のチャンスを提供する。

このプロジェクトの成果は、国内の生産者が日本市場に参入することを目指して、オーストラリアの果樹産業にフィードバックされる。今のところ、日本向けオーストラリア産バナナの大規模な輸出市場はない。

オーストラリア産バナナの99％以上は国内で消費されており、オーストラリアでは相対的に賃金が高いため、オーストラリアの生産者はこれまで東南アジア諸国からの輸出に対抗できていない。しかし、環境に優しく有機栽培のバナナは、日本でプレミアムな価格を獲得することができ、オーストラリアの生産者が進出できる可能性がある。

DAFは、食品廃棄物削減共同研究センター及び農業法人パシフィックコーストプロデュース社とともに「バナナの品質低下を抑制するためのサプライチェーンの監視と改善」プロジェクトを主導している。また、デインツリーフレッシュ社とそのサプライチェーンパートナーであるハロウスミスインターナショナル社は、日本へのプレミアムメロンの輸出拡大に向けて、このメロン品種の収穫後処理を含む栽培試験を実施するための資金を「食料と繊維の市場化のための産業パートナーシップ」（FF2M）プログラムの下で受け取った。

パシフィックコーストプロデュース社の取締役であるフランク・シアッカ氏は、この試みはオーストラリア産バナナの輸出経路の開発に役立つだろうとしつつ、「当社は2009年からシンガポールと香港に『エコガニック・バナナ』を輸出してきたが、果実の入荷時の品質が予測できないことが将来の市場の成長の障壁となっている。弊社のエコガニック農法システムは、商業的な食料生産における生態系の回復が可能であることを証明する証拠に基づく強力な科学に支えられている。プロジェクトとDAFチームは、プレミアムな商品の安定的な提供を確実にする取組について、その改善の機会を特定するためにはサプライチェーンのパフォーマンスを監視することがいかに重要であるかを示してくれた」と述べた。

クイーンズランド州のマーク・ファーナー農産業開発・水産大臣は、DAFの園芸専門家たちはクイーンズランド州の農産物の輸出経路をさらに増やすために業界を支援する上で重要な役割を果たしているとして、「バナナはクイーンズランド州にとって約6億豪ドル（約600億円）相当の重要な作物であり、新しい潜在的な市場の開拓を続けることが極めて重要である。この果実の輸出方法を最適化することで、バナナが日本の店頭に届いた時に、オーストラリアで購入するのと同様に新鮮でおいしいことを確保することができる」と述べた。

執筆者：リアム・オキャラハン